Ⅲ.　分担研究報告２

厚生労働行政推進調査事業費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業
令和５～7 年度　分担研究総合報告書

サリドマイド胎芽症患者の健診事業からみた健康実態に関する考察

研究分担者　長瀬 洋之　帝京大学医学部内科学講座呼吸器・アレルギー学

研究要旨
2023～2025 年度に当院で健診を施行したサリドマイド胎芽症患者 12 例を対象に健康実態を検討した。多くの症例で高血圧、糖尿病、脂肪肝、高尿酸血症などの生活習慣病関連所見を認めたほか、筋骨格系症状や歯科・口腔領域の問題も認められた。加齢に伴い健康課題は多様化しており、多職種連携による継続的な健診・健康管理の重要性が示唆された。

A. 研究目的

サリドマイド胎芽症患者の年齢は、2023～2025 年度の研究期間中に 61～64 才に達し、一般人口と同様に生活習慣関連疾患を高頻度に併存する年代となった。本研究班では 2010 年代より健診事業を継続しており、サリドマイド胎芽症患者の全身的健康管理に貢献してきた。

2020 年からは COVID-19 流行の影響により、感染対策や生活指導を中心とした支援も行われてきたが、流行収束後は、生活習慣病、筋骨格系疾患、歯科・口腔領域の問題など、加齢に伴う健康課題への対応がより重要となっている。

本総合報告書では、2023～2025 年度に当院で健診を施行した計 12 例（2023 年度 2 例、2024 年度 4 例、2025 年度 6 例）について、その健診結果を総括し、サリドマイド胎芽症患者における健康管理上の課題について検討した。

B. 研究方法

2023～2025 年度の当院での健診事業において、計 12 例に健診を施行した。対象者は 1961 年から 1963 年に出生した 61～64 才のサリドマイド胎芽症患者であった。

健診では、既往歴、現在治療中の疾患、困っている症状、生活習慣等について詳細に

聴取した。検査として、生活習慣病関連を中心とした血液検査、心電図検査、聴力検査、胸腹部 CT、腹部超音波検査、上部消化管内視鏡検査を施行した。さらに、希望者には歯科検診を追加し、女性では乳腺・婦人科領域を含む検査を行った。

健診は午前 8 時 30 分頃から開始し、16 時頃までに終了する 1 日コースとして施行した。

C. 研究結果

1. 生活習慣病関連所見

12 例中、多くの症例で生活習慣病関連の所見を認めた。主な異常として、高血圧、糖尿病、脂肪肝、高尿酸血症、脂質異常症、BMI 高値などがみられた。

高血圧症については、複数症例で治療継続の必要性が確認された。糖尿病症例では HbA1c 高値が認められ、継続加療の重要性について指導を行った。また、高尿酸血症や脂肪肝も複数例で認められた。

心血管関連では、虚血性心疾患既往例、陰性 T 波、前壁中隔梗塞疑い、左房拡大疑い等が認められ、循環器的評価や継続的管理の必要性が示唆された。

2. 消化器・腹部画像所見

上部消化管内視鏡検査では、食道裂孔ヘルニア、バレット食道、GERD、慢性非活動性胃炎、びらん性胃炎、十二指腸潰瘍瘢痕、胃底腺ポリープ等を認めた。

腹部超音波・CT では、脂肪肝、肝嚢胞、胆石、胆嚢低形成疑い、総胆管拡張、脾血管腫疑い、腎結石等が認められた。繰り返し受診例では、過去所見との比較により著変がないことを確認できた。

3. 筋骨格系・整形外科的所見

頚部から肩にかけての疼痛、違和感、変形性股関節症、腰椎前方すべり、潜在性二分脊椎等の筋骨格系所見が認められた。日常生活動作や加齢に伴う身体負荷の蓄積が背景にある可能性が考えられ、整形外科・リハビリテーション領域との連携の重要性が示唆された。

4. 歯科・口腔領域所見

歯科検診では、歯周炎、歯肉炎、顎関節症、義歯調整の必要性などが認められた。上

肢障害型患者では、セルフケアの困難さから口腔衛生管理が不十分となる可能性があり、継続的歯科介入の有用性が示唆された。

5. 喫煙・生活習慣

現喫煙者が含まれており、禁煙指導を行った。また、歩行習慣や運動習慣を維持し、食事管理にも留意している症例も認められた。

過去の研究班検討では、健診受診者の喫煙率が全国平均を上回っていたことが報告されており、加熱式タバコを含めた喫煙対策や呼吸機能評価の重要性が再認識された。

D. 考察

サリドマイド胎芽症患者は 60 才代に達し、生活習慣病への対応が重要な課題となっている。本総合検討においても、高血圧、糖尿病、脂質異常症、高尿酸血症、脂肪肝など、一般人口と同様の生活習慣病関連所見が多数認められた。

2017 年に発刊されたサリドマイド胎芽症診療ガイドでは、患者年齢が 50 才代半ばであった時点ですでに、脂肪肝、高血圧、脂質異常症、高尿酸血症等の高頻度併存が報告されている (表 1)。現在はさらに加齢が進んでおり、これらの疾患頻度が上昇している可能性が高い。

表 1　サリドマイド胎芽症における生活習慣病の頻度 (文献(1))

因 子	全体(%)	男性(%)	女性(%)
中心性肥満	20/82 (24.4)	14/33 (42.4)	6/49 (12.2)
脂質異常症	26/73 (26.3)	18/44 (40.9)	8/55 (14.5)
高血圧	42/85 (49.4)	26/39 (66.7)	16/46 (34.8)
耐糖能異常	16/98 (16.3)	12/43 (27.9)	4/55 (7.3)
高尿酸血症	22/99 (22.2)	19/44 (43.2)	3/55 (5.5)
中心性肥満と脂質異常症	3/94 (3.2)	3/40 (7.5)	0/54 (0.0)
中心性肥満と高血圧	5/85 (5.9)	2/34 (5.9)	3/51 (5.9)
中心性肥満と糖代謝異常	1/ 91 (1.1)	0/37 (0.0)	1/54 (1.9)
メタボリックシンドローム	7/87 (8.0)	7/34 (20.6)	0/53 (0.0)
脂肪肝	43/84 (51.2)	25/37 (67.6)	18/47 (38.3)
非アルコール性脂肪性肝疾患	16/48 (33.3)	13/24 (54.2)	3/24 (12.5)
骨粗鬆症	8/64 (12.5)	3/27 (11.1)	5/37 (13.5)

特に高尿酸血症は慢性腎臓病の発症に関連し、上肢障害型患者では透析導入時の血管アクセス確保が困難となる可能性がある。そのため、腎機能保護を念頭に置いた長期的管理が重要である。

また、本検討では筋骨格系症状や歯科・口腔領域の問題も多く認められた。上肢障害による身体負荷やセルフケア困難が背景にある可能性があり、整形外科、リハビリテーション科、歯科との多職種連携が重要である。

さらに、喫煙者も認められた。胎芽症患者では身体活動性低下リスクが高い可能性があり、COPD 発症予防の観点からも、禁煙支援や呼吸機能評価を継続的に行う必要がある。

一方で、定期的な運動習慣や食事管理を実践している症例も認められ、健康意識の高い受診者では比較的良好な健康状態が維持されていた。繰り返し受診例では、経年的変化を評価できる点も健診事業の大きな利点であった。

COVID-19 流行期には受診者減少がみられたが、近年は再び増加傾向にある。今後も健診事業の結果をわかりやすく発信し、事業の意義を周知することが重要と考えられた。

E. 結論

60 才代に達したサリドマイド胎芽症患者において、生活習慣病管理は極めて重要な課題である。また、筋骨格系症状や歯科・口腔領域の問題など、加齢と障害特性が重なった健康問題への対応も必要である。

健診事業は、生活習慣病や加齢関連疾患を早期に把握し、患者個々への助言や医療介入につなげる有用な機会であるとともに、胎芽症患者特有の健康課題を抽出する上でも極めて重要である。今後も継続的な健診事業と長期的フォローアップが望まれる。

文献

1. サリドマイド胎芽症診療ガイド 2017. 厚生労働科学研究費補助金 平成 28 年度 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 サリドマイド胎芽病患者の健康生活実態の諸問題に関する研究. 2017.